

地形萌え

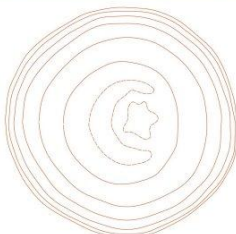
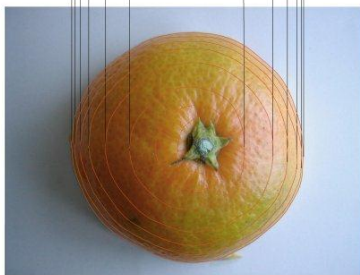
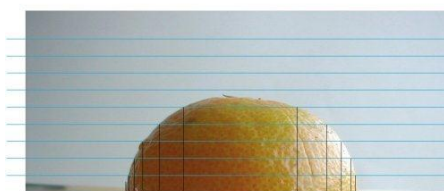
オリエンテーリングで磨いたナビゲーションスキルをアレンジして登山者の世界に提供して早12年。幸いなことに専門家からも一般登山者からも評価を得た。今や、オリエンテーリングは知る人ぞ知るナビゲーションスキルの宝庫である。

正攻法が一段落したので、裏技にも磨きを掛けることにした。かつてこのコラムで紹介した「地形萌え」もその一つだ。特徴の少ない森の中を地形を頼りにナビゲーションする私たちオリエンティアは、読図のできる登山者と比べても遙かに微地形に対する感受性が鋭い。斜面にちょっと出っ張った小さな尾根や鞍部、傾斜変換線……。あ、こんな地形いいな！と思った経験があったなら、あなたも立派な地形萌えだ。最近では山女子を意識して「胸キュン地形」とも呼んでいる。地形に「キュン！」となれたら、恋した外国人とコミュニケーションしたくて語学に精進するように、等高線を読みたくなるモチベーションも高まるだろう。

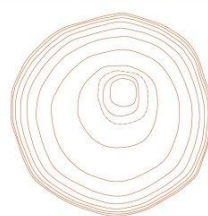
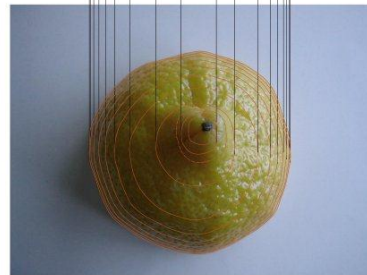
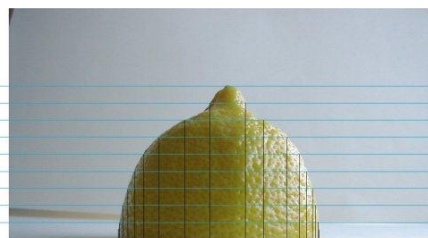


葛飾北斎の富嶽三十六景「稲田の水車」は、渋谷川にあった水車がモデルだという。稲田の地名は、今も周辺にある公民館に残されている。

11月に発行したエイ出版の「山岳読図シミュレーション」にはそんな裏技を満載した。地形萌えはもちろんだが、さらに「ぶらタモリ」で人気を博した都市地形という視点も入れた。東京のように、近世に市街地が広がった都市は、重機のない時代に土地改変をしたので、地形を大幅に変えられない。いきおい、地形の特徴をよく残した市街地が残った。この世界で有名な渋谷では、地下鉄銀座線が地上3階を走っていた。山の手台地では地下を通っていた銀座線が、渋谷駅がある渋谷川の谷を横切るからだ。渋谷から、アウトドアウェアのフラッグシップショップが軒を連ねる表参道までの間には、かつ



みかん山

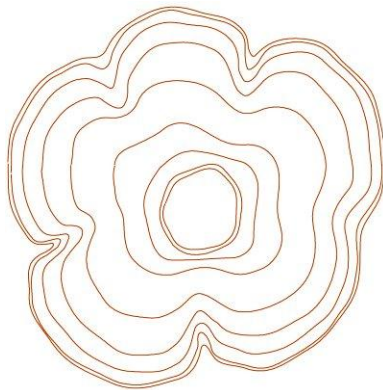


レモン山

ては渋谷川が流れていた。表参道脇には水車まであって、葛飾北斎の富嶽三十六景にも描かれている。スタート地点はどこでもよい。地形を意識するチャンスが増えれば、興味を持つ人も増えるだろう。

「山岳読図シミュレーション」で実現したもう一つの試みが「やさしいde等高線」だ。ミカンとレモン（これは果物だが）を横から見ると形が違う。その違いを等高線で表したのが上図だ。

そこで、出題。下図の等高線が表す野菜は何だろう？



この問題を facebook で出題したら、「正解が気になって夜眠れない」人が続出。知っているはずの形が等高線と結びつかないもどかしさが、解答意欲を高めるのだろう。

一般に難しいと思われ敬遠されている等高線への関心がすこしづつでも広がれば、それだけオリエンテーリングの裾野も広がる。

時代はロングトレイル

雑誌「日経トレンドリー」が毎年11月に、「来年のトレンド予測」を特集する。2013年のトレンド予測第一位は「ロングトレイル」である。

トレイルという用語は、今やトレイルランニングで、世間に周知されるようになったが、「ロングトレイル」は、耳慣れない言葉かもしれない。しかし、「東海自然歩道」といえば聞いたことがあるのではないだろうか。イギリスの長距離遊歩道をモデルに1970年代に作られた東京の高尾から大阪の箕面を結ぶ長距離遊歩道で、全長は1600kmに及ぶ堂々たるロングトレイルである。その後も首都圏では、関東ふれあいの道などが整備された。アイデア自体は

決して目新しいものではない。それがトレンドに乗ってきた背景はいくつか考えられる。



日経トレンドリーの紙面。ロングトレイルは今年のトレンド予測堂々の第一位。その一つであるスノーカントリートレイルには、多摩オリエンテーリングの田中正人氏も関わっている。

一つは、トレイルランニングによって、登山道や自然の中の小径の「トレンド感」が高まり、森の中の小径を歩くことが「お洒落！」になったのだ。山ガールの登場も大きい。山ガールによって自然志向の若い人たちが増えたことに加えて、ピークハントではない山歩きが脚光を浴びるようになった。1990年代の前半、山登りではない野宿を伴う徒歩旅行を「トレッキング」と称して、学生と楽しんでいたが、当時はそのような自然との関わりはマイナーなものだった。今でこそメジャーになったシェルパ齋藤さんも、当時はかなり際物っぽいレポートや本を書いていた。

もう一つは、信越トレイルの成功だろう。ロングトレイルは決して新しいアイデアではない。しかし、はっきりいって東海自然歩道は失敗だった。環境庁が作ったのはよいが、その維持管理は各県に移管されている。いきおい、整備状況はまちまちで、ルートがかなり荒れているところもある。おそらく土地利用の関係で作りやすいところで作ったのだろう、ルートもアクセスは今一つで歩きやすいとは言い難い。ロングトレイルなのに、テント場も含めた宿泊施設との関係もほとんど考慮されていない。歩き通すのも大変だ(図5)。

そんな状況の中で、2009年に信越トレイルが登場した。その名のとおり、長野と新潟の県境にある関田山脈の稜線を斑尾高原から天水山につながる約80kmのトレイルだが、地元ボランティアが中心となりトレイルを整備、整備のための協議会を発足、さらには、泊を伴う踏破のために、途中の峠から麓の宿舎への送り迎えのサービスをシス

テム化させた。こうしたソフトの充実が、徐々にこのトレイルへの人気を高めている。今はやりのトレイルランニングイベントも確実に人が集まるが、利用させないというところも潔い。加藤則芳というカリスマ的トレイルウォーカーの理想のもとに、コンセプトがしっかりしていることも、地味ではあるが、徐々に人気が出てきた秘密だろう。

日経トレンドリーによれば、とにかくロングトレイルは、他の消費活動との相性がよい。地域興し、地場グルメ、健康志向、体験型観光、山ガール、男子3人旅・・・それこそが、現在は一般的には高い人気を持っているとは言い難いロングトレイルがトレンド第一位に挙げられた理由だろう。上記のような現代のトレンドとの相性の良さは、ロゲイニングにも似ている。

今年夏に誕生する「日本最大級のトレイル(日経トレンドリー誌による)スノーカントリートレイル」は、群馬県みなかみ町から新潟県湯沢町、十日町、南魚沼市を巡る280kmの大トレイルだ。オリエンティアであり、日本のアドベンチャーレース界の第一人者であるみなかみ町在住の田中正人氏も関わっている。上述の信越トレイルには、長野県オリエンテーリング協会的美谷島孝氏も深く関わっていた。オリエンテーリングとロングトレイルの接点は意外なところにある。

おりしも、日経トレンドリーのその号が発行された当日、僕は富士山を周遊するロングトレイルのシンポジウムの

パネリストに招かれて、富士市にいた。県の道路行政部局や国土交通省の出先機関が後援に名を連ねており、行政からも注目も感じられる。

事前の打ち合わせの時彼らが持って来た候補ルートは国道469だった。主体となるべき県の行政もロングトレイルのなんたるかをよくわかっていないようだ。静岡県の推奨ルートを問われたので、子どもの国から村山ジャンボ周辺までささっとルートを引いてあげた。このエリアでオリエンテーリングをする度に、オリエンテーリング以外にほとんど顧みられることがないのをもったいなく思っていた。昨年の富士山一周トレラン(UTMF)でようやく、そして、富士山一周ロングトレイルができれば、恒常的にこのエリアへの注目が高まる。時代はやっとオリエンテーリングに追いついてきたのかもしれない。

シンポジウムの後、出席する副知事の発案で懇親会をやることになったので、下心いっぱい出席した。副知事は所用で帰ってしまったが、収穫が二つあった。国交省の担当課課長が、大学の語学クラスの同期だった。約30年ぶりに再会し、昔話に花を咲かせるとともに、事業の裏話も聞いた。「村越が話しをするっていうんで来たんだよ」と嬉しいことを言ってくれた。もう一つ、シンポジウムに参加していた富士宮の副市長が、某女子学生オリエンティアのお父さんだった。静岡県のオリエンテーリング活動は最近富士市に偏っている。富士宮方面こそ、潜在的に大き



東海自然歩道

な可能性を持つ。「富士宮ならメッカになれますよ」とリップサービス、いや本心。もちろん、それはオリエンテering界の力量が問われる機会でもある。

クライシスマネジメント

今年から愛知教育大学と共同で、博士課程大学院をスタートさせた。僕の担当科目は学校危機管理論。1999年、玄倉川での集中豪雨による14名の水死以後、アウトドアのリスクについての研究を主要テーマの一つとした。教育活動全般の危機管理への展開は必然的だった。11月18日に行われた第三回目授業のテーマは、クライシスマネジメント。発生する前に未然に防止するのがリスクマネジメント、起こった危機のダメージを最小限に抑えけるとともに、できるだけ早くそれを正常状態に戻るのがクライシスマネジメント。その時、僕はクライシスのまっただ中にいた。

11月上旬にJOA宛に東日本の中止を求める脅迫状が届いたのだ。その後、脅迫状は都合4通届き、最後には開催施設にも届いた。1通目の段階では悪戯も視野に入れた。折しも「黒子のバスケ」イベントへの脅迫状事件がネットにも紹介された時期だ。それを真似た可能性もある。しかし、その後の執拗な脅迫状や開催地区近隣からの投函などから、悪戯と断ずる根拠はなく、最悪の事態を考えなければならなかった。利用施設やその利用者への影響も考えない訳にはいかなかった。もちろん、「屈する」ことのデメリットも考えなければならない。結果として実行委員会とJOAが出した結論は、南足柄での大会中止であった。

この大会はインカレロングも兼ねていたが、学連理事である木村氏の対応は早かった。箱根から無理なく運べる可能性がある静岡東部での代替開催を打診されたのが大会の3週間前。16日前に中止および宿舎の移動を決めると、実行委員会、学連、静岡県協会は、開催のためにあらゆるエネルギーと知恵を2週間注ぎ続けた。周囲の人の理解と協力にも助けられた。参加の学生たちも、統率の取れた行動で、余力のない実行委員会を助けた。そして、12月2日、静岡県富士市のこどもの国で、インカレロングは開催され、何事もなくその日は終わった。

実行委員会の負担は大きかったが、ダメージは最小限に抑えられた。その一方で、オリエンテeringというスポ

ーツが、真偽のほども分からない脅迫状数通でいとも簡単に中止に追い込まれるという弱点も露わになった。1970年代の様々なトラブルを乗り越え、現在は賢く地元とつきあっているかのように見えるオリエンテeringだが、どこに火タネがくすぶっているかは分からない。地元とうまくやっているということが幻想ならば、それ自体が新たなリスク源なのだ。



なんとか開催にこぎつけた
インカレロング2012大会

同じことは多くのアウトドアスポーツにも言える。富士山一周トレイルランニング大会の開催にあたって、僕自身実行委員の一人として地元の反対運動の急先鋒の方とも話し合い、また官公署ともやりとりをしてきた。表だって反対する人はいない。しかし、イベントをよく思わない人はどこにいるかわからない。そうした人たちがいつ理性を失うかは誰も予測できない。その意味で、この脅迫状事件のクライシスマネジメントとリスクマネジメントはまだ続くのだ。

(村越 真)